

らららん18号



2019. 3. 2

「ライオンのおやつ」

小川糸さんが書いた「ライオンのおやつ」は、読み応えのある小説だった。三十過ぎの独身女性が癌になり、瀬戸内のホスピスで終末を迎えるというお話だ。しまなみ街道沿いにある大三島のロケーションの良い宿泊施設が、どうもそのホスピスとして扱われているようだ。あらすじをざっくり紹介すると、終末を迎えた患者の皆さんが週一回もう一度食べたいおやつをリクエストする。そのおやつに込められたエピソードを紹介しながら物語が展開されていく。

私もどう終末を迎えるか、そろそろ考える必要があるのかな？と思う。改めて、毎日をしっかりと生きること、それも大切だろうと振り返る。

では、最後にどんなおやつが食べたいとリクエストするだろうかと考えた。

私は多分、山口県でいう〈柏もち〉をリクエストするだろう。

本当の柏の葉を使っているわけではない。「イギノハ」と言っていた。なぜイギノハと言ったかは、ツルにトゲがありイガぽいつくりをしていたからだろうと思う。図鑑では「サルトリイバラ」と呼ばれている。つる性の植物の葉で、光沢があり餅を包む葉として都合のよいようになっている。サルトリイバラは、サルを捕まえるくらいのトゲがあるという意味が、名前の由来らしい。

私が小学生の頃、サルトリイバラの葉は、山に入ると比較的簡単に採ることができた。時期的にはちょうどゴールデンウィークあたりだったか、大きめの葉を集め、もって帰ると母がイギノハ餅を作ってくれた。この葉を持って帰ることで、イギノハ餅が食べられるのだから、熱心に採っていた。

今のように、スナック菓子を日常的に食べることはなかったのだ。だから、印象深い食べ物になっていた。母の手づくりだったことも、うれしかったに違いない。

私の母は亡くなっているのです、作ってもらうことはできない。今年のサルトリイバラの葉ができる頃には、自分で作ってみようと思う。失敗は覚悟の上だけど……。失敗作でも、子や孫に食べさせてやりたいと密かに計画している。



子どもは楽しい！

担任の先生ほど子どもと接することはないのですが、毎日園にいると楽しいことがときどきあるのです。そんな出来事をここで紹介します。

【エピソード1】

私が歩いていると、よく子どもが足に抱きついてきます。不意にくると転けそうになるので、いつもキョロキョロしています。先日、小さな女の子が私の足にしがみつきました。しかし、いつもと様子が違います。下からじっと上を見上げているのです。

「どうしたの？」と聞くと・・・

「大きくなったねえ」でした。

そうかなあ？大きいと気づいたということか、感嘆したような声が面白かったです。

【エピソード2】

幼稚園には、先生の手づくりおもちゃが置いてあります。ダンボールで作られた洗濯機や冷蔵庫など。それに異論を唱える子がいました。

「園長先生、これは本物じゃあない」と言っているのです。

「何が？」と聞くと、ペットボトルとホースで作られた消火器を指差します。赤いテープと黒いテープを巻き、なかなかよく似ていますが、彼は本物と見比べて・・・



「本物はにぎるところがあるんだけど、これにはないんよね。ニセモノじゃあないかな」なかなか分析的に見ることができるとだね。すごい。でもね、がんばって作った先生の気持ちも考えられたら、もっといいなと思うよ。

車などでの迎えのお願い

今年は暖冬のせいか、日差しがある日は温かさを感じさせるこの頃です。最近気になるのが、車や自転車などでお迎えの皆さんが園庭で立ち話をされているケースをよく見ます。お話をされていることを、厳しく禁止するつもりはありませんが、そのときお子さんは園庭で遊んでいるという状況が気になります。意外にこんなとき怪我をしやすいので、園は勧めてはいませんし、怪我をするのではないかととても心配しています。また、話し込んでしまうと区切りをつけることが難しくなります。3～4人の輪の中で、本当は時間が気になっている人もいないのでしょうか。しかし、こんなとき「やめましょう」とピリオドを打つことはなかなか難しいですね。

園の駐車場は、上限の台数が17～18台なのですぐにも満車になります。駐車場のスムーズな運営を行っていきたくないので、ぜひ皆さんのご協力をお願いします。